殘夷巡嶋記

第六編

卷一

春

書庫
へ
143
30
165
番號
168
數冊
40

へ13
3093
26

曲亭主人著

朝夷巡島記六編

歌川豊廣画

文金堂梓

丁亥發兌

三樂字號

昭和九年七月二三日

吉田屋

朝夷巡島記第六編序

原平義秀事實東鑑所載不過於小壺角觝及妙戲海潮捕鯔鱷三隻事與建保血戰破門拉敵奮勇無前最後汎舟以走安房事也是以坊間冗籍唯神其勇力而不知其智術亦捷于世至甚者則云義秀身後於冥府威服閻羅奴僕冥官其言可以悅閭里小兒而不足爲士君子道也予嘗以謂義盛八子而義秀爲白眉渠其勇悍

門へ13
號3093
卷26

非下啻與漢樊噲為中伯仲上其智略亦將有似張子房何者彼敗軍中善脫難免而不使敵終身知其存亡當時苟以報怨雪恥之志則不與父兄俱死也宜惜乎時不至終漂泊海島而鴻雁之傳信焉者無矣是故不遇於北條氏以聘之辱則勝乎田橫辭漢伏劍但以其事蹟無所攷識者為千載遺憾此予之所以戲著巡島記也初發研之際予約于書肆文金堂是書刊行至三十卷則可以結局也爾後六續編簡冊垂五六然而腹稿未吐盡者幾過半矣光陰難追又費幾日焉書肆之不飽利以編述不速為恨予乃倦于筆研獨悔是著不易果彼我急寬莫奈之何敢思欲因前約輟筆於是編文金堂允之否未遑告是意本編五卷手稿成即便是為序

文政九年仲冬之日書于神田廟東著作堂南檐木犀花陰

簑笠漁隱

朝夷巡嶋記全傳後輯第六編總目録

第四十九條　諏訪嶺豺狼　照射山鷲鷲
第五十條　莊官林淫婦　山蛭橋殘獸
第五十一條　濤筵粉餅配　陰悪倒應報
第五十二條　後花十田窠　涙種一節籮
第五十三條　家廟投入花　弟迎常葉枝
第五十四條　濱角舳禄物　小壺海巨鱷
第五十五條　由井濱奇貨　執權邸交易
第五十六條　浮雲禳猛齊　團坐席夢話
第五十七條　節義守戸浦　損益頭髻塚
第五十八條　天妙女柱乞　勇悍人貨獵

本編五巻總目録終右第四十九第五十、兩條雖既出前輯總目録中而鼇為本編第一巻因重出以充巻數

北條時政之

長舌危國
平勃未誅
良人非噲
汝似呂須

後妻牧之方

小阪太郎

兄弟角力不柔
不剛勇名雖惜
恥似鬪墻

和田新左衛門尉
常盛

芋田
陀忠

北條相摸守義時

你是陪臣謨執國命若微泰時九世何盛

前報未盡
餘殃相同
祖孫終處
在浴室中

源二位頼家卿

二世暗弱
君臣亂離

秦有
闇樂
景盛
似之

安達左衛門景盛

其の書八毎編五巻なるを是裏ふ第五編を綴りて日書肆が時の後ろを[illegible]
やう一巻遺しく駄屋で四巻を毀敗さうかれば今この編この選れを剰入れて必ず巻之
さべうりーを高又書肆の好み任しくあらびも五巻鏤出さ一ず五編ら送ゼ一巻を
補ふ[illegible]故ゑ本編八楮數の例より倍を敷ぎを一百四十餘頁ゑ[illegible]
るりとふも省官例の六巻も敵ん欲とその所為ゑりけり○右ふ見を出像の中ゑ牧子八初
編と五編ゑ出くとの編ゑ八出ぎるを六の簡端ゑ画ゑ十八是裏編出像の拾遺宜安逆
景盛と比企弥四郎能久八第七編ふ出るれを并ゑ頼家の修善寺浴室中ゑ圖の
如ゑも皆後編の趣向ゑるを今とこの処ゑ見ゑりい省官ゑのくこの画ゑりて第七編ふ[illegible]
とをゑめと想像せられ一端みとそゑるをの室咲の桃桜を[illegible]類ゑ[illegible]

姓氏追加　小阪太郎　富部五郎　稲毛三郎義氏　四郎義直　五郎義重　六郎義信
七郎秀盛　八郎義國　右兵衛尉朝盛義氏祭義盛子孫　安達景盛　比企能久同上
草賊鼠乃木衷平　芋田陀忠二

通計一十二名　崖略仆姓氏目終

新

東海六編巻之一

後輯第四十九

東都　曲亭主人編輯

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之一

諏訪嶺の犲狼
照射山の狒々

案了前詢再説朝夷三郎義秀八ゑる四月の中浣平泉の柵ゑて猛ふ光仲
義邦ふ辞ー別れて只ひとり越路を投くゑく程ゑ追苗らくとゑそ徑岐道
足ふ信ーつその順逆ふも拘らぎ又遠近をも擇ばバいくぞくの日を経ようけん陸奥
ゑる寶川より越後の八田ゑそうも入りるこれより福取焼山綱木天満津川の驛ヲ
四里ゑりて山路を来て角嶋とう唱へる福村を過る程ゑ前面ゑ一座の大山ゑり
名ゑゑ越の諏訪嶺ゑり時ーも四月の下浣山八半面雪を流ーて樹木の若葉八
崩盡さび軽寒軽暖他州の二月ゑ似られども日八ゑと長ゑ獨行ゑ言葉歇ゑ

あるゝ事なれバ飽と云ハ睡眠を催し餓れバ疲労て歩果敢なゝこの日も下晡
なるゝ頻よ物の欲しゝなりゝふ颯と吹下る山風の魁ハせんとくゝて来つゝ酒の
香芬と鼻よ入りゝを珍らゝも好ましゝ忽地目覚る心地しゝく但見れバ
ての村盡処よ只獨屋の酒店ありゝを朽傾ゝる茅の檐ふ高く一朱の杉の葉を
掛るハ彼味酒の三輪ありゝの帝の謎ありゝ門邊よ猛犬ハをゝ猛ど酒ハよくも
沽ぎとおゝしく一両脚の凡掛床ハ寂寥とゝく憩ゆめゝく突立ゝる土憲を
薪竭ゝ灰冷ゝく鍋の中よりゝ湯氣絶ゝう義秀ハ性とゝく酒肉を貪る
めゝ為ども長途の疲労を息へん為且十分の酒氣を帯ハ彼大山を
踰ゝゝんと思ひ立れバ突立ゝる鐵棒を酒店の門の片隅よ倚ゝて
菅笠の紐解もあゝ誰を在らゝと呼ゝゝ床几よ尻をゝも掛れバ家
あゝゝゝん奥のゝより一個の老人遽しく出迎へゝく客人酒を用ゆゝ欲五夕ゝゝり

ゝゝ篩ゝん欲有ハ豆腐の石焼と山獨活の酢味噌茹のゝゝゝゝ
と問ゝく義秀ゝも微笑有ハ両種共よゝゝ十分酔人と欲ゝ五夕
ゝゝ酒何よせんヨヌ必ゝ問ゝ疾篩ゝゝとゝバゝゝ斑ゝ蓋ゝ顕しく
ゝち笑ひ客人ハ他郷の拜ゝ五夕ゝゝゝとゝゝゝこれ商せ當州ゝくゝ片口
ゝ滋器ゝゝゝ五夕と唱ゝゝれバ是他州の酒五合ハこの地方の五夕ゝ豆
ゝ家の酒ハ茶蘼漉ゝれども中汲ゝゝ酒気烈しゝく味ひ醇厚しゝ
人を酔ゝれバその醒ゝと究めゝく遅ゝゝこの故よゝ名ゝ上戸ありゝも獨酔よ
しゝ五夕の酒の上を過ゝゝを稀ゝゝれバゝゝ國風の曲子ゝも酔ゝゝゝゝ五
夕の酒小一合過さバゝゝ酔んと歌へゝゝと誇ゝよ答ゝ間よ憲よゝ
柴折焼ゝく豆腐を煮ゝゝ酒を盪め彼酢味噌茹ゝゝ共よ冗ゝくゝと垢染ゝ
塗打敷よ安排てゝて来ゝく義秀ゝとく義秀ゝよ蓋ゝゝ笑坪よ入りゝ四表

八表を語らせ、件の五夕を傾盡しくて再び五夕の酒を飾せあるじゆも喫せあど
せ、ぶ色せ、もも盡しくうとくもる程よ塒餌求食る雞の檐下よかへり来に
なまバ義秀これなおろつ紀て外面を瞻仰るよ日ハ山掖よ没らんと紀ありよ
時を移しおろとおとうごもて遽しく腰よ著こら貫緒をとゞめよ解出さあゞに
酒の賈を取らせ靴絆の紐を締更こく左ゐよ菅笠引提こく嶺を望て出んとすバ
あゝゞハ急よ掖留め客人暮ぬよ程もなし今よりして數里の嶺をいでゝハ越ぬん
いあゞ他も失ぬ紀ぬ近曾彼諏訪の嶺ゆを夥の狼群出こく人を害ゆこと限あり
昼とゆくども獨行ハ恙なきの稀あるとバ五七人の同伴を俟ゆこく嶺を越るか加旃
あゞ比より近き山里ある女子どもの中こくハ彼ゆ失ることあり中もあの程を密
と夫よ誘引出れ行んとこく彼此隈なく索ねこどもその跡もなくその女子を探こく
邁ゆんとゆふ男子もあゞ寔よ怪しきあり紀と人もいゆ我もそのよ誰ゆ出せ行あねども

もう紀比より彼山ふ怪獣二頭栖まるこそ必牝と牡とあゝん好こて人畜の血を吸ふ
女子ハ宍喜らこあゝく血のゆと多ゆるのあれバ這奴男子ゆハ目をうけゞ女子ゆみこと捉こと
ゆうさゞもと女子ふ限るところハ男子ゆとく油断せバ可惜命を失ゆべし。これらの風聞
かれ行ふ客人今より夜を犯こく彼大山を越ぬんは幸あるこく狼の牙を脱こと有紀
又彼獣ふ腹せらるゝんあより山のあるこゝ行地の里ゆでハ人煙もあり枉こく今宵ハ
宿よ暁ゆ人と正首よ諌るを門の片隅ある彼鐵棒をとゞ只九膚ある彼寔ゆ
丁こと猜こる義秀ゆこくも笑ひ山ゆハ狂狼ゆふあゞ山魅木精もあゝん人を害
皇土よ主出さんこくよく天意よ随のゆハ欲寡こくせざること有く心丹田の下よおちぬく
要時も内よ動こゞバ物亦外より害ゆとゆ人ハ獣を怕こともれハ何ともいぬん
さゝ怪談をあゝこくく彼客を權こつ留めんと欲こるも世渡こるゆく方便ゆとそれハ路を
貪りて旅ゆこるのよあゝ紀ども憩ゆこく酒を喫こるを輙く嶺を越ハ為こるも件の

怪談に驚されくたびれ歌ばこの快酔をいとはせんとて雑談せばもあれといまて
あるじは頬おくまるにも腰立て眼を睜りまれは好意をもて云云といひまさを腰
ぬけとりて世をうち北方便あんと坐をうちて朽をしられ今をを口は猛くも利け顕あるも
登著うで阿容々々として立返り宿貸せとて勧解ぬひとと呟くを耳やもたぬ義秀
袖を捕めく衝と出るを鐵棒をひとり突立て遍といまぐいくを忽地に日は暮
なり山腰は他所よりも入相のいと早かるに比四月廿日あり三四日とふ鳥夜なれば豫て准備の
續松に火を鑽移し道を燭して鐵棒右にあて諏訪嶺に攀登るに昼ごろ人跡
絶て深山の夜はいとく寂寞たる山氣肌膚を犯しく夜風面を撲に尖く巌石路
横りく樹根に足を取らるに悩めり目よりるものは星の光耳に入るものは谷河の碎
落ふと凄じく義秀匹夫の勇者なるねば武藝に誇り膂力を頼て漫にその身の
危なきを忘れるにあらねども既に十分の酒気を帯ては進て退くことの懶く年少

れば血気強くてかゝる夜行をもるあるべくさる程に義秀は羊腸たる山又山を或は
登り或は降り往来て今はいまも巔に近つきぬんとするに二十四日の月は出で傳ふ
子の半ばなるべし。この比の夜の短くとも巔あるも登著うで既に夜半を過せしは不知
紫内なる故にとやうにつゝ空よく晴く隈なき月に逢られば是よりしくく又
蕉火を續更にあらず頻りに焦燥に又一段と登果く樹枝深る処に至れば
忽然としく狼のあく声高く聞えり義秀これを物ともせずにあくに向てゆく猟
左右なる山卯木のさゝくと戦ぐるをいと大なる狼のその数九六七頭前後左右に
顕れ出くるを真圓にとり圍こり義秀うちあるく些も驚かず前面につのゝ狼を
跳越つゝ遍んとにふる後方なる一隻の狼猛の如く走来りく義秀が腓腸を噬
例こんとに近つく程に義秀これを尻目にとく足を飛して礫と蹴る蹴られく些
怯む処を風標の如く身を振へくく鐵棒推取延つゝ眉間を丁と撲へば一声

苦と叫びむあへず平張忙く死でそりその際より前なる狼又後より走蒐るを義秀とも
身を反して閃くや鐵棒を打れてこれも亦筋骨砕けく仆とう残る五頭の狼はこの
為体を活路を求難く彼此へ逡巡をする程を義秀透さずと叫びて四角八方を薙
立れば狼ハいよく避易して迯とも脱さじと思ひたん忽地人のごとく立くあのく腋の間より
明晃々たる氷刃を抜出く撃んとす義秀これを佶とゑく原来癖者ごとこれ漏
しせじと棒とり直しく大喝一声嘯く蒐れば斃ひ千鈞の石を投て雖卵を推ひな
異なれば狼ハみな瞬間に骨も殯くばかり殺されく統に一頭遺りしをそれをも
うも落されく戦慄れく腰くも抜しを抗声をあらくく発しめと叫ばかん義秀
呵々とうも笑く鐵棒右ふつ犯立汝ホこの假狼愚民を惑し旅人を殺しく
その罪を造りくる憶ふ是汝ホハ山賊のと拠犯めしこの餘の同類あるあん
頭領立くる奴ハ犯狀詳に首伏せよのいどめのくわと責問ば山豪ハ平伏くる頭を

擡くさいひも及ばせめひん某ホハ平泉なる經任ゲ大將に四天王と呼れる鐵有矢藤五
重連ゲ隊兵でもひ經任滅びぬりしと犯矢藤五に從ふく奥を逐電をうしとり又
矢藤五にまく捨られく今ハ頭領もゆいぞ又この外に同類やしもくく矢藤五ハ曩に
經任を見絶く厨川の柵に起犯彼柵の大將なりし象子彈平太負持を詐言て
軍要金三千両を掠奪り某ホをく越前なる三國湊に起犯て遊女們を駄
聚合て酒宴遊興夜を日に繼くる樂しまく央なる駄の金を沙のごく用散を
くく疑れ忽地人に密訴せられく遂に守護より指向られる捕手の兵に不意を
撃るく且く防戦ものくく克くくもあくくれば壁を毀屏を乗く負散をあり
しかり矢藤五ゲ往方をくくば某ホハ下隊七人當國に逃れ来くあの山林を所住と
せしに近曾この山中を怪物夜あくく人を取喰やこの風説ありよくく猛に思起
して七人齊く狼の皮を被犯く夜行を遮り里人旅客を追却して露命を繋犯

ゆゑなかるまじ駿計ハ有とぞ思ふ獣ハ姿を変ずべし山豪ありと八人みなあるべき追
捕の沙汰を脱るべく跡を隠ふ便りとうち相譚ひしかりてこの所ハ大人ハ
一人當千鬼神を欺く本吏あるを夢やゆめ知るまじ獨行ぞと侮るべく
忍地命を隕しる六人の名ハ云云あり某ハ角乃水の哀平と云べきものぞ神威を
犯しるその罪萬死ハ當れども願ハ慈眼佛意をもて免しゆへと勸解ハ
義秀ハ冷笑ひ原来汝ホハ彼鐵眉矢藤五ゞ隊下の小賊なりし狡られ賊
将經任ぞ屑ともいふべき然るを況矢藤五をや彼奴ハ柵を走りて
且くも天誅ハ漏せしを遺恨あれ縱汝ホ数を盡しく幾百人聚合をもるれハ
この程ハ唾して蚤を取るよりも易うし勸解られ汝一箇を免ぬ人ねね
ども窮獣既ハ尾を垂て媚て命をもとめハ稿夫もこれを殺さんかれハ今宵ハ
汝ゞ首を且く軀ハ預ぬ千せん逃とも誅せ〳〵ともそを天意ハ任ぬべし

いひけく近邊の藤蔓引断く縛ゆ猩兒のごとく牽ゆく先ゆ行ハ
繋ぐ〳〵陰霾る雲月を隠しく朕朧とする隨ハ夏ハ寒ハ山風のゆ冽く
肌膚を徹して毛骨栗立つ程ゆあれゆ怪しげる二頭の獣突然と走来く
六箇の賊の痍口より流れる血を吸ふく共ハ餘念ハ如しゆ義秀ハこれを
透しゆく酒屋のあるじゆ云云と不問語とゆうる怪獣ハ見ゆれ先ゆ行ゆ
鐵棒をゆ〳〵取揚く寇近つハ邪と声ゆけく先ハ進ゆ一獣を微塵ゆ
ゆ下ゆ獣も亦眼をゆく一文許ハ退ハ三頭等しく疾視る晴の光ハ
射て長庚よりも輝ゆ義秀ハ一の棒を受損して遺恨ハ堪ハ再ひ間近く
よせんとすれハ両獣も油断ゆ迫ハ遠ゆ窺ひて義秀焦燥く打棒ハ来らんと
進ゆ支落して頭短ハ颯と引く程もあるゆ一獣忽然と後方ハ立く撫ゆ
とゆうゆ義秀ゆ〳〵ゆ鐵棒雲時も止ハ輪々と風車の遠ゆ砂くハ振

廻して前後より些もよせ著けざ進退不測の修煉の効奥精神あるべくかの
鬼ゝ拉く搶法より怪し〻両獣ハ敵〻なれども共侶より逃んとしるを追
過さじ追携さく些し後れし一獣の腸貫矢と打折けば一下声叫ぶ声と倶に形
滅さあるりんを義秀ハその一頭ぐも拍撃留ざりるをいと朽をしく思へども雲
かくれせし月さえ出ぬ不知案内の山中を追めとものぞる及ばぬをひかへしく
徐々と書の処より退却て松の株より尻くも掛く且く汗を納れてもりその樹の幹
繋れる荒乃木の衷平ハ怪獣の光景と義秀ハ疾働が我を忘れて酔るう
如く呆惑めくつのをう浩処より峯上を隔く咄と揚しる閑声の裕より応て果しく
その男九百人許るあく照らし蕉火のうをかかれつ隠ること漸さよこゝ近つを
義秀遥より佶とうんく噫あるもなぬるものをまつまとこの山賊の支黨欲さう
ぞハ狐狸の所為欲をそとるれかくもあれ這奴何ぞりのるゝハをるるひのまよ

りよりて鑒ゆくられんぞと獨より領ぬく衝と身を起して件の棒を小脇より
挾を立さうる且して彼衆人ハ間近くある隨より真先より進しハ是ハ一個の武士
ありるを年齢ハ五十のくんを三四つ有ゆくくうん孔藤より野装束して腰ゆ
朱鞘の両刀をゆめしげより跨く左もゆ重藤の弓を握ゆるを携る背より箙
箭の箙を負ゆり相後より者共も或ハ弓箭或ハ衍戟及列卒縄を要ゆして
みな後れじと進さう當下武士ハ義秀をとゆかくるあるんゆりて其処ゆるを
什麼何人をゆと問へば義秀声高ゆるふるれハこの山を過る旅人なり和殿ハ亦何
人をゆと問へるれく些も擬議せるれハ津川の荘官ゆく皿山盆九郎高盛と
呼ゆるゆる近曽この山より夥の狼群ゆく人を害ゆと多なり又怪獣ありて女子を
捉るとゆえーぶ此彼とゆる猟弾さんとて里人猟夫夥ゆく今朝より深くさけ
入りて猟くくそハ照射山獲物ゆれハ二鞋の家路をさして還るゆる図ゆ

諏訪嶺
義秀七賊二
獣を退治せ

物を獲ることも和主ハ何ホの故ホ夜をあく山を越ゆると再問へバ義秀答て
云ハ陸奥より越後を過りく越中ヨ赴くなり角鳴ヨ宿とるべきを数ヨ道を食
まくこの山路ヨ日を暮しつ今より些し先の時ろ〳〵ばもこの処ゆく狼ヨ打扮ふ
山賊六人を打殺しその一賊を縛置りそのゆ怪獣あり二頭忽然と走来て死骸の
鮮血を吸ひ〳〵ぶ又これをも駆んとせしかその疾を飛鳥のゆく猛犬と虎狼ホ勝
れ〳〵もとかくしてその一頭の肩尖をまてくふ打ふ〳〵ば倒れぜしく逃亡ぬ
路間られバ追ひも索後ぞかくてこの草賊の来歴を責問しホ箇様々の奴原
ありなを送むなく告るもん盆九郎ハ必も果さぬ驚ぬつ且歓びく従者ヨ
蕉火を抗さしくそぶ俱実撿しくふ果しそいと大ぬる狼の皮を被ぬ暴男
共もべく六人肉破ぬ骨砕けし死骸ハ算を紊せどく又一人ハ藤蔓ヨて松の
幹ヨ繋れふ尺これのもゆ大約その遍ゆ今まで来る峯上ゆく生血を引

なること駭し盆九郎ハこの光景ヨつゆ驚噴しく恭しく左右のゆを膝ヨ措つ
義秀にゆ對ひ凡眼明ゆきれバ世の豪傑を認らぬく殆礼を失へり願ふハ海容
ゆひそよ和殿ゆ一臂の助ヨよりてこの山賊を悉誅伐せれしゆ一隻の怪
獣を獲ふ事既ホ明ゆる如く某今朝ゆ猟暮しく真夜中ヨ及ぶゆ眼ホ
遮るゆゆ空しく還らんとゆ思ふ今峯上ゆく怪獣走来つ彼射留ゆと
ふ程ヨ忽地ヨ仆ふ炬光ホ就く熟視れバ奇怪の形状いゆべくそゆ肩尖ゆ
腋下ゆ打破られく骨砕け血の流るを駭し原来この痍で斃れし什麼何ゆ
撃ふけんこのゆ人を捉るゆ怪物ハこれゆ悪し倘甦生るとゆ思ふんと
躍く短刀ゆ吭を深く刺んとせしゆ皮肉堅しそゆ刃を受ぬ辛しそゆ刃尖を
刺串ぬく足を縛め枕ヨ掛く六箇の里人ホ舁しゆれもこハ和殿ヨ撃れる
彼猛獣ホ疑ひ〳〵しゆ後方をふ〳〵りつゆ物これへと

下知されバ里人ハ件の獣をほとり近く舁まろぶ又一両人蕉火を振照しく左右ハ立り當下義秀ハ徐ろに進てこれを見るに獣の揔身四尺ばかりにして面を画る夜叉のごとく眼圓に唇厚く牙光しくその口の大なること頤に連りく耳の下に及べり況又長爪ハ劒のごとく赤黒紀毛ハ赤熊に似く頭もいと長く蓬を乱て尻迄垂り死して眼を閉て恵を送る悪相ハ怪しきのみも疎し義秀乃ハ猶つくづくとうち程に盆九郎も又進とありく某壮ありしとも猟を好て山又山ふかく人を屢ありしかども獣をとらん何とのあらんと問ハ義秀沈吟しくこれハ狒々の種類なるべし嘗聞唐山劉宋の建武年中日本仁賢帝の御宇猿人闘々の雌雄二頭を進らせしとあり闘々又これを狒々とも國俗の山猿と呼做せるなり狒々と異あり時に宋の明帝その土人丁蛮に問ハく闘々の形いかなるものぞ答て言さくその面粗人に似く紅赤色ありもハ猴に似く尾ありよく人のごとくものいふ鳥の声の如しよく生死のことを知て力千鈞を負て足れり反踵かくれバ則物に倚る人を獲れバ則先笑てこれを食へり猟人因て竹筒を臂に貫て誘ひ出すその笑ふ時を伺て速に抽て錐をもてその唇を釘おさへ額に著れバ猟人ハ必死をもの死ることを候て裂て血を取るものありその髪ハ甚長くして頭髪とあり住血ハ鞣及緋を染まず堪ることを飲ハ人に魁ることを有とあり明帝ひそかに画工に命てその形を圖せしめ本草集解に所見あり今これをかくの人ハ狒々といふも遠くしてさゞれ人を咬ことを兒その唇を反して笑ふ必ずまさしくこれを好く人畜の血を吸ものハ素よりその身に血あり類を感しく嗜さるゝと言精細に解諭せバ盆九郎ハ歎服のあまりを額に推當て感ることを半晌なり和殿ハ實にその武藝の技葦なるのみならず文学にも亦闌なり世に貴名を

とをはざれば願ハ名告をうし宿所へ倶して歓ひの盃を勧めんあれ慶さの
俊又やと只管誓て已ざりける かれども義秀ハ聊ものゝ心あれば終ふその實を
告ぞこれ受ひらけも免賞美ハいく分は過さう某元来安房の浪人浅井小豊六と
いひのめし親族とおく妻子もかれば武者修行をせばやとく旅より行ふ月日を祈
もり此度ハ越の中國ハ志せよーあれば縁竭せハ再会あるべー蔡曲る夷平ハ
置土産ハ進らもる免さんとも誅せんとも国法のあるゝ計ひあるべし退らんとひらけて
立別れんとしーうーくば盃九郎ハ袂ハ携て遠しく引留めそる酷情かー某ハ道より
こゝをこの荘官る甲斐もなく民の害を除れて土地ハ功ある旅人を一宵も泊ぬ
これを労やとおくハ後日ハ守護より咎を蒙らんと疑ひかー枉く且く立より
ともり聆くうるく故さひハ義秀ハ已とを辞ぜ僅ハその意ハ任しより却説亞山盃九郎ハ
若黨軒松妻二郎ハ両人ハ分付くく六間の賊の首を刎さーそぶおのく被きる狼の

皮ハ裂しとれをバ列卒ハ舁しゝ又夷平を牽立さーく義秀と共ハ麓ハ下りく
角鳴村を過るとゝ天ハほのぼのと明ぬ
この時既ハ起ぬく門の戸を推開ゝ
旅人と列拉く駅の後者ハ罪人を牽しかるーげる獣と狼の皮をうく四ゝ
舁しく意氣揚々と還ぬあり訝しゝ限りもなれば後れる後僕の伴とり近く
立向ひく縁由を洛れバ往僕ハ誇良ハ義秀が衆賊を殺と彿々を殪せし為体を
言葉ぬ〻しく告しーくばあるーハ呆れて舌を吐ゝ人ハ見被ハ恐ハ男おかねば
とも彼旅人の柔和なるさまの本更わんとハ一切ひらけざれば暮るゝ山を越と
いひをとくう駅しく禁しゝの悔しきよさてゆくとろふをとうごろく目きり
りまる程ハ義秀ハ荘官盃九郎ハ誘引れて舊来し道ハ立入さふそ宅所ハ里人の
駅より東へ入ること二町ばかり一構の衡門あり老る松柏多れバ里人ハ字しく

荘官林と呼做しより盆九郎ハ己が宿に還ると等しく義秀を客房に請坐しつ
なし早飯を羞め浴室に入れなどしつゝその管待等閑ならねバかくて又盆九郎ハ
諏訪嶺なる山賊と狒々を退治せし為体を一通ㇼ書写しつゝ飛脚に齎して
國府へ遣しぬ又表平を鞫問するに鐵盾矢藤五が残賊なれども外に同類
あることなしよりて表平が首を刎て彼六級の首と共にこれを津川の市に梟て
狒々の頭も鐵簞に貫きつゝ添てその攪暴を牌に識しつく亦そがあらん傳ふの
陸続と東西より南北より走聚ひとつ三日観者恰堵の如し。これよりして義秀が
浅江小豊六と名告る假名も亦高く只管にその武勇を稱賛せぬも
なかりけれバ又彼狒々の聲漏されし一頭ハ遠く外山へ逃去りん今後に他
村なる女子の先ろをもなく賊の患ひも絶まされバ人みな安堵の思ひをしつゝその
恵を慕ふのあまり義秀が生祠を祭りのさへ有ましとなん。

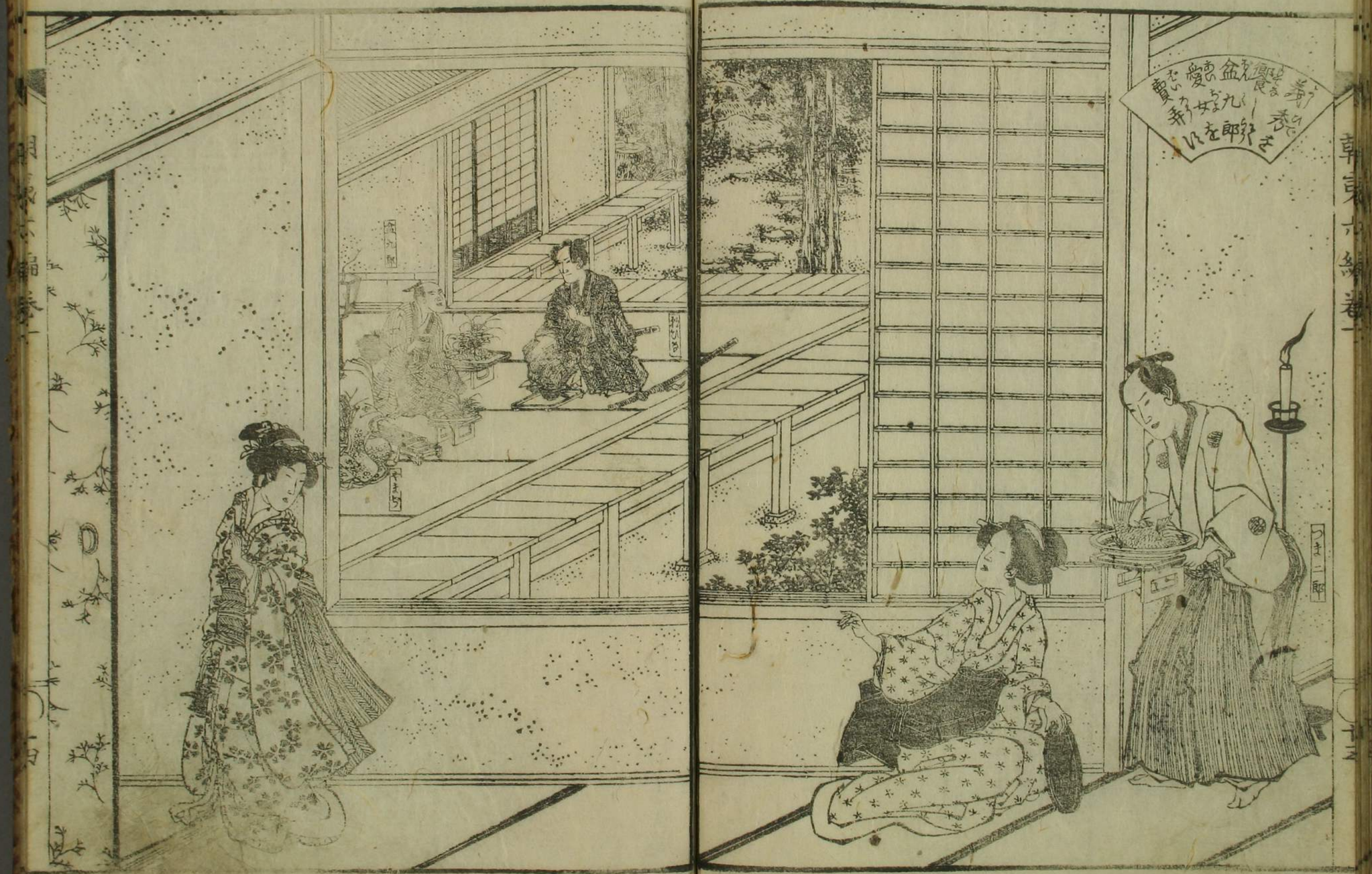
後輯第五

荘官林の淫女　山蛭橋の残獣

再説荘官皿山盆九郎ハ妻を夙く喪ひて只ひとりの女児ありその名を山路と
呼做る年ハ十七八なるがかゝる片山里に生育どもその才貌勝れたり母ハ國府の
ものなりければ幼稚きより筑紫琴を幾組か習ひけん土地に罕なる風流女なり
なり母なくなりて後ハなほ父の寵愛弥ましく佳壻をながらく擇むも田舎ハ人物
質朴なるを山路が意に稱ずもあらざれバ縁談今に整はざりけれバこれが為に日を運し
情をしれるものもあるべし親盆九郎ハ女児の為に奸を防ぐを倫児を御するが如く
深窓に養立て俊傑が女児なりとも八郎らならと思ひより他話休題盆九郎ハ
義秀を饗応せんとその宵酒宴の席を開くに海味に疎き山里なれども
庖丁ハなけれども椒葉の年魚の姿焼藻伏束鮒の骨膾など種々の酒飲の

准備せ〜東道態大そうなる書院は燭臺を措奉さく義秀を嘗侍せ八
奴婢ホハ銚子を執るもあり配膳は侍るもあり客さねとを稱へる當下
盆九郎ハ恭しく義秀は勸めくいるを浅江ねし恥らくハ滋味珍
饌はあらねども頼ふハ一度過しゆ某何ホの福ありて欲もらんも世の豪傑ホ
值偶の歡びいかんぞ討とらく紀山賊異獣の一時は滅亡せるの頼附驥の
面をおこせり迺上ホ忠節ハこれまあらんん記録は載せず孫に
伝へく話柄とたべ死のを皆是和殿の賜ものあれバ忘ホす志を表はるか村
酒とく嫌れぞハ本望ホをとゆふ義秀も亦饗膳の謝を述礼も盡して或ハ
受或ハ授送は浮つ浮られて初献やゆ果しと紀盆九郎ハ又義秀にち
對ひく某一個の女児あり山路とぞ名つけるいと拙くハゆへども琉紫琴を弄き
とき嗜ゆり彼と有は今一度過しゆと勧るく山路々々と呼らるるバ豫て

准備をあらうん山路ハ艶妖ホ結髪化粧ていと綺羅やうの夜衣に揩落
あるる帯やの字の似く結下べ屏風の背よりくも知る親の後方は坐を占て且
義秀を拜しけ當下両箇の婢共琉紫琴を擡来て山路がほとりホ推居
るバ盆九郎ハ笑しげホ山路は例の一曲をとくくと促せゆどおふ羞らひらる面
色ゆく僅は琴を引ひくさくある匣の中より撰取る假爪をいと素く細
やかなる指ホ絹めて調子を試こ梅ガ枝ホよる鶯の囀るとく唄ひ出ぶ容ゆり
あるぶの咲しげホ頼りは耳を傾けうさぶと獨義秀ハ声色を好ホばいと
厭しくもくどむ心を用ひ曾待を辞んともさらぶゆく胸中ホハ爪弾を
ものざるとそもどその一曲の訖とやぐて酩酊席は堪ぞと称しそもバ〜盃を
辞しくれバ盆九郎ハ送憾くもゆめくく強るあるく〜ゆくまづ山路を退して盃
盤をとり納めさて湯をそゆめどる程は婢共は客房ホ臥簟を布設うと


盆
愛
女
郎
賣

告さるゆゑ義秀ハ盆九郎より謝を述暇をこゝに願ひ臥房より起ぬ。
昨夜通宵睡らざりしゆゑ人々ハ熟睡せしもあれど義秀ハ翌風めく
辞し去らんとすれ共その曉より起ぬ。真夜中ヒより雨降そゝぎ且くも間
断なく今朝ハ風さへ吹暴れこれより盆九郎ハ頭りを留めて已ざれば義秀ハ
風雨の為め又一日を過せ程より忽地足より疼痛を覚て左の向脛高く腫
れ。こゝを一昨の宵訴訟嶺わく彼彿々二頭を前後わり著聚倒さんと
進ミ来れ共耶瓜を被られ。と思ひ外れどかくものゆゑ患ゆゑ危殆とハ
そゞ根懸念せざりしかこれより苦痛酷しく心ざろハ早れども歩不便
なんもゆゑ盆九郎ハこの形勢より驚き憂ひ彼此より醫師を招き病症の
軽重を訊問ふこゝを全く悪獣の遺毒あり[illegible]の如しさるもの毒ハ
浅ろう氣長く保養しあゞ十餘日ゆく愈つゞし愈るとのゝとも三四十日。

慎こゝを禁足せられハ筋縮り骨冷く廃人となるとあゝんと五人ゆく四人ハいろう。
これ[illegible]盆九郎ハ[illegible]その醫師を擇ぶ湯剤膏茶授るゆゑ日毎に
義秀より勧められハ五日ゆく膿血潰え七日ゆく瘡痂を生し十三日にしく
全く癒ろう義秀ハ総角より一日も病ることのあれハ心頻る焦燥くゝ辞し去
らんとすれども醫師ハさらり盆九郎も今ハ[illegible]後こゝ再発せハいろハせんゆゑ
且くと禁めら浅ろうぬ人の善意を破らんとのさるゆゑ一日くと明し暮しつゝ又
十餘日を経よられハ皐月雨も稍霽つゝく夏も半ハ過ろう。これより先ゆ
盆九郎ハ義秀より退屈させこゝ務の暇ある毎より問慰めるといとゆく或ハ文
武を討論しその日を消せともあり或ハ江湖の雑談しこゝ燭を秉る宵も
ありこゝ義秀ハ性そゝく生平ゆゑ言葉寡くれとも議論ハ敢讓こゝゆく安博
妙論意外より出く新ゆゑとゝ盆九郎ハ感服しいよく捨ろくゆゑ

あまり有一日某に告ていはく言究めく卒命をいと無礼しとおもはれん欲某
今一條の商量あり寔ふ奇しき縁しをかく裏ふ交をあへハ且試まうものぞん
曩日見参ふ入うし女児山路ハ年もをを十八よなりまう壻とうるに用意
その人を求まれば今よ至れを某ハこのまう十餘村の長くるハ莊園も如此々々
まう鄙語ふいを鳥あ紀里の蝙蝠ふ似られども里人ふ尊敬せられて来馬
あり畊牛あり奴婢十餘名を役使へハ衣食よ乏しきもあ紀遵鄙の卑
職を嫌れをハ山路を和殿ふ妻しく職役所領を譲らんとおもふ光陰の
過易紀を白駒の隙よ喻うふ血氣よ任して旅あり行よ武者修行あふ
今泰平れ世あり武を用る時あ紀願ハあふ留りく生涯
無為を楽をを人うう宿望ハこのまのまを和殿のあうのうををといと正直ふ相譚
へハ義秀実く眉うち顰め二所不住の某をあうこと篤うしでう言ふ及ん

いと執をを紀まあれども某性僻不羈ふく人の壻とまう果へを人貫
あ紀り且をくより思起しを武事修行の為國郡を遊歴せんと欲をしれも北國
をうをまを極めを況京より西のく四國九州ハをくをを寔ふ光陰ハ白駒の隙を
過るう如し倘中途ふく抑留せられハ生涯悔るとも及ひをんをを放遣られんを
遥ふをして推辞を聴うを推ふをして和殿の武藝ハ既ふを諏訪嶺を目擊
うをを勇力ハ携をひ鐵杖ふく推量りう廻国修行をとをを誰うをの
右よ出を紀相応しかを婚縁を強く勧るハ嗚呼をくをを紀と某も両刀を身ふ帶ふ
ををを言ひをを紀ハ駟も及ひをを嫌れうとを意を盡を紀言を盡を
この侭已まをを紀の日ふう遺恨を解んををを深念をををを紀人のをの言
果紀ハ是我秀国ふをを又紀人の厚意よ悖ををハふ薄情よ似られども匹夫も
その志を奪をを紀況大丈夫うををを宰我子貢を媒妁ふくをうをを紀説を

とも別れ呑んとも無し。かくても聴まじい病癒全く愈ぬれば袖を拂ひ去らんのこの餘の尋思はいざとなれば声高くなりぬ隨ふ氣色なるもしるべ。盆九郎は愈々不覚なるのひうけく悔しがるまで腹へそこもさうそ色も顯れ肚裏は思ひのあるこの人實はなほ女児を嫌ふあれば且く底意を探らんと推辭あるべんもこれ一朝一言は綜整べ保ぬ事あるんと思ひ久あく。さて雑談は紛らつ遂ぬ強さまり卻説皿山盆九郎は思ひ起せし殖縁を推辭もて已くとなるかさまるの彼人武邊を旨とし色情は疎くとも豈その身の浮浪を省みて久後遂ぐこと思へばあるんなる家は祖父の世平家盛りし時よりこの一郷を管りていぬ元暦文治の年間より鎌倉殿の御家臣なれども村落國府へ遠ければ人は知らざるも況親しく鎌倉へ出入り勤るあるはなほ彼人を女婿はせばその武藝を文学はもとこれより家を興さんとこれ有べしとぞ。あは軽諾は信寡し彼人即座は兼りさうしへその性浮薄はあるべし此は就て彼はつ疑くも走らしかれば夜半の夜竊は山路はいかあく親あるからるを示ばは要あるべきなれども彼浅江小豊六を婿はせばやと思ひ。みづから説勧めかたは武者修行の志願ありて彼人はかくもあれ小豊六は如何あく山賊異獣を退治して民の為は害を除きしるべ宿の賓客へ脚の疲の大愈こうとなれども醫師の歩行を許さねば籠りて後然のべし。さあくとも陣暮を五月の空は癖なれば軒の玉水音も絶せば夜は衣を襲ね寒は夏なれども冷かり山里は蚊もあく懶も寄らひど旅はあれば寤寐不楽しく在ん。ぞうん今宵よりして宵々毎は彼人の枕邊へ来んは日来嗜みの伊勢物語を遇く讀て慰めあるべとい被てもも含咲は山路は顔の赧むをは羞

て応せざりしを怠むりくいかまとく兼ねて山路は初更の比より物の本を携つて客
房へ赴くとて或は子二つ或は丑三つ深ねば退妃くつのが臥房へ入ることあれども奴婢
ら情由を知らず密々に議ども盆九郎のみ獨笑して綽もや成ぬこそ
謀計を設けられこれを仔細に原れば山路は親に分れ雪々毎に義秀が
慰る狭と思へばいとあはれ渠は稼てより密夫あり盆九郎が傭若黨は軒松
妻二郎と通ずるは陸奥の信夫元晴に仕へしものなれば元晴は戦敗して賊の兵火に
圓山の館を灰燼とせり比妻二郎は辛して塹を渡り圓を脱して越後の津
川に落留り由縁の家に寓居して下日々々と送る程に荘官屋敷にたち入りく
三四ヶ月を経るに抑この妻二郎は今茲二十五歳し故主の戦敗を外にうんて
逃竄れるものなれば素より人とありを賞ぶべきもとより容貌美く
そその進止賤しかれども且算筆は人に優れるものなれば。この時盆九郎が
家の若黨且く身の暇をとりて舊里へ退りしぶ盆九郎はその時又立
かへり来る日妻二郎をとくこの妻二郎をとり取て月傭ませ日より心を用ひて勤れば
盆九郎はなほ代の人を求めんと欲ひく早晩宿所に起臥させく不便の事ども
なりける程に妻二郎は今且くの主の盆九郎が意に稱へく出頭をるのみ
山路も竊に愛驩ひく親しく抱ひ慰しるも小人罪
なり。抱らるて罪ある主と為れば外視の関を越ると幾遍といふとあれば盆九郎は
これを知らで山路が月来媒ぞ縁の整ざりしかるる密夫ある故ぞと
一点ぞうも曉らひべ今義秀を留んとくよりぬ所行を女児に誨へくその淫奔を
肥まるれバとをとその霄より山路は親の意を受く義秀が起臥を
客房へくやうへく彼方へ寄も著ぜ次間ある褊室に妻二郎と密あは私
語の粗漏とく義秀はよるもつぐ枕の隨に溺るの霄とそも形

義秀はあまたの光景ありて凡弾をせざるをかく肚裏ふ評をつくしの主人
金九郎は邊鄙出身稀なる武事も文字も些はあれども取るに足らざる人なり
渠が客を愛するも又人を識るでなくうるもみな名聞のためにして實はこの利を
揣るのみにして裏柔弱なく表剛く陽は公にして陰は私多くなるあり土民を
憐むでなくれども公事を假托して誅求すること少なくして且施を好むよりしかどもその
性究竟鄙吝にして人を奪らんと欲すれば先且くこれを與へて老氏の必ふ似
るあり。これ頃日その挙動ふ意を附くこれを知るべし渠賄賂を受けて足る
ことを知らざれば賞罰共に正しからざるを愛ふ溺るる故ふ国門の内にあるべ現
その女児の淫奔を遠ざけんとして独危起らんことを恐れ今そうしてこの廷ふ抑留
せられて婚縁さへふひ被られしかども恥べ死するこう毒瘡既ふ愈られバ日
ならで発足せんと思ひ決めり只管ふあるでふ別を告んとて金九郎を尋ふ
きのふより公役ありて在宿せざりしを怪せども辞せず去らんとせざるを心ありて
又あくふ一日二日と送る程ふ五月も下旬ふ入りて黴雨晴の天定り難
梢ふ朝蟬鳴く北国も稍暑ふ向へり程ふ金九郎はこの両三日公
務ありて家ふ在ると稀なれども漢を婚縁の一議ふ要時も宵ふ
忘れざる既ふその日果しべ今ハふ比ありんとそこの日宿所ふ還るとそ女児
山路ふ長くなりて八月ならば此彼と婚を擇んで決めるを浅江ふ入るふ稍ひ
つんこれもまたるとて涙のいとまを越えいとまを後を急ぐ過ぎ行くに
今宵小豊六と婚姻を執り行ふ偏屈なる性なるふ
身の浮派を恥らへば云云と推辞せんかれば且告ぎしく今宵ふ意ふ
盃をとり結ばんと思ふ。その準備して風爐も浴ぶ化粧も整へ
日暮て物ふく整ひ祝儀の衣ふ改めく。ひとり彼処へ赴くものごとく慰めへ

これハ時分をえ計まくいはく箇様々々ふいん内祝言のすゑれば媒妁とかくても
。ようやく後日ハ里人を擇あいて〜もその人わん今宵ハ黄道吉日なるゆ五月と
いふともけうこんあるべきなり始めと真ぐもく竊ハ謀合しうり山路ハこれをもむ
呆れく要時回答も始めて忽地胸ハ塞りくひとうれりくもへども今さら推辞
べくもあらねば終の眉を聚て面色ハ紛らハ。もくいはもく領知をかハ光
惚子ぞと思ひとる親こころを無慚なれさる程ハ盆九郎ハ今宵の酒食を塩梅
なんとそ且くも庖湯を去らで譴使ハるく奴婢共ゲ揚る擂盆ハ雨あくく神北
鳴る欲と疑れ敲く青蕪八人の日ゆゑ七種囃をふ似うるもその献立を候へば
塩竈混布ゆ巻鰯これらハ座著の肴ゆく青鷺の吸物ふ片暮蕷のおらハ
火とり加減ゲ肝要ぞとろのゆふ世話を焼味噌ハ苦り切る蕗の葉の刻茹をく
雑ゆそ上を下へと返しる鱆の紛れふ便をなる山路ハ竊ふ妻二郎を物蔭ふ

招知りく今宵のうを云云と告て頻ようも泣る涙の際ハ又いゆく浅江を
やんゲ止宿せしてゆハ座敷の塞ゲりくあふ夜ハいとゲ稀ありしに家尊九人ふ
云云といはれしうをかしより絶ぬ夜毎のゆ枕も夢こ覚く浅ゆ終ハ
脱れぬ今宵の暫婚礼ゆ親を欺知し不孝の罪を重ぬ。もあんゆを乗つ
捐られて他夫ハ添ゆんや契りし言ふ偽ありくもしそゆ思ハ
又泣沈ゲば妻二郎ハ歎息しく絆既ハ急るれば且くも猶豫あるくし今宵
ゆんゆをかく走らん追人蒐りて脱もくくハ共侶ハ死んのゆさく往方ハ云云
ゆりゆる暗号ハ箇様々々と具示して慰れば山路ハやう〜く涙を飲てくくもの
夜を契て謀合して別れりかくく山路ハ外視を竊ゆ日来愛るもゆゆ
いくつか初ハ包ゆく臂近ゆる沙金流銀十五六両私しくもく妻二郎ハ進ゆ
ゆゆ妻二郎も亦密々ふ起初の准備ゆ日の浅果るもゆ程ハ黄昏ふ

なり當下妻二郎は親同胞なれば親交も或は討ち或は落ちう故郷に
なるを今更奥の高舘へ入るとも又誰をか憑ん當國蒲原郡なる新潟なる聊か
しるべ
識る者あれば且く彼処へ落著て其処より京あれ鎌倉あれ便宜を求めて又
さらに走らば後悔なるべしと思ひ決めて山路なれども豫て云云と裏なる路費を腰に
袱包を引提て出んとなすに兼てこれば編室の壁に掛る一張の半弓あり
妻二郎又をとなる今新潟に赴んに両條の路あり中も五泉街道は坦地なれ
ども追人もあるを指もなるべし諏訪嶺は難所なれども路程いと近し今入るも彼
山は山賊の患もなく猛獣もなしぼと女子なれども深山越は兎角
物ものそ追人遁らば樹隠れて遠箭に射て落さん嗚呼あらずと遽しく
件の弓をとりあらして蘭の箙箭二條ばかり抜出しとり添くるあく小脇に挾み
外面より出て侯ば山路も暗闇を違へ出しく庭門より潜出るを妻二郎は遠
く走りよりてこれを披扶けて西北をさして走りあり有斯

益九郎文庫

移るまでこれとなりぬその夜初更の比及ふ饗膳やうやく整ひ
改んとて納戸のそばに赴くと客房をさし覗くに豫て
諭せしあるを渠何処へか遁去りうん是首欲彼首欲とぞうふ家の内隈なく
厠の戸まで開けうれども影もなん跡もなし
集合泳ぶ山路をあくざる欲妻二郎も何地へか入ると訪ひ
情由をあるのあらバ態を告よとあるを舞せるしく答るは奴婢ハ目こ目を
往して舞等しくいひうるを現さるもゆんなるハ昼あり娘なるを聞へ遠るを妻二郎
密語くるも症なるを罪とうるけしとあれども情由とてハ知ぬ娘なる
宵々毎に客房なる賓客を慰めと家尊の仰を受うと宣ひ
客房へ入るとその次なる編室やく妻二郎と楽しげふ相譚
微音を洩さず

よ賈ハ是ゆゑ彼此れ情由ハ言ふ迄もなく盆九郎又異に原来山路ハ妻二郎ゆ
誘出さく走りしかん噫無慙又今ハ如何ん衣裾のうちもくさしハ失ふ物ハさぞわらん
いかゞ汝ハ告ざり況それ賓客浅江生と壻ぐひの風望あり彼人ハ尚報ねども
推て婚姻の用意はこの種々の献立ハ今宵の儲ありしを今さく山路ハ社ぞ
ありくた抽頭の花と風ハ奪れ掌中ある珠を揺ハ沈やし心地ぞ
趣と浅江生ハ嘆れあがれ亦何を面目ハさいひ解ハ辭あらんや汝ハ豫てまう
さうすありと知りあがらうれハ告ざりしを越度なくハ彼妻二郎が故郷を
陸奥の高館又當國の新潟ハ由縁のあるまりとのいひあれ投く往方ハ高館歟
新潟の外あべからず僮僕们ハ二隊ハ分れて西と東へ追遣ハ里人を駆催
しく訪顔のことを追ひそん噫無慙やと敦圍く只管ハいそぐ立れば僮僕们
あらゆる果てあのく捍棒薪火を引提く外面へ走去りしる程もあらせず盆九郎ハ

竹法螺取て吹鳴らせば彼此ある里人ハ云何のことと驚騒ぎて利鎌連枷引提
引提荘官林へ聚合ひん盆九郎ハ綽の延云云と云ふ示しハ苗守ハ老僕と婢共ハく
せあるとの詞も訖らず刀を引提て嚔しく外面へ出れば里人ハ蕩火を
照らしく従ひ来れば又義秀ハ毒瘡大さく愈しかば日ハ盆九郎ハ
告んと思ひしかども宿所ハ在らざれば其ハ黙止せしハ昼ありあれ吉せれば
今ハ発足せんと心ざしハ早れども庖偏のくふ人集ひく薪水ハ暇なしかば
奴婢もくあらんかつくべ況主人ハ出て来ぬとの鎖ることを程ハこの日ハ暮ハ
ろかく初更の比及ハ家内猛ハ騒動しく慌ドが頻りに罵る声奴婢ハ何等こと
彼共ハ取ハ取ふくぞくしかば疎しく耳苦しきハ勃然としく怒りあり
文兄山路と孫んが妻二郎しろハ若黨と逐電せしを豫てありもあり
ちひしくよそを驚くべ兄のかしねども盆九郎ハいと左礼ある女児を餌食られを

釣りて推て今宵婚姻を整んと謀りしを外に笑ぐさも堪られず蕙蘭の室に入るものは自づから香しく葱韮の園に憩ものは臭氣を負ばとかなしかくまで穢れ家と知りなば今宵もまた暁さんまでに主人は早く臥りとも速に立去て通宵彼高嶺を越てんと思ひしかれど金九郎はその性究めて鄙吝なれば月来止宿して用ひし薪も多かりけるにこれらの酬をもくべかれとて沙金十両ばかりを裹みて留守なる老僕を召ていかにこの頃日主人の厚義によりて毒瘡もどうやらやうやく愈しかば別を告んと思ひぬ。折の主なくて黙止すも夏の旅は夜をそよかなれば今より辞し去べし。あれば還りあらばこれ進らしてよろしくと頼み件の金を遣して身を起さんとしてければ。老僕は言と物を受てよろこびをなしつゝやはらく其旨を聴ひつとなりかねて辞を盡して推制んと欲れども義秀決して留らねば縁頼また力なく。草鞋の紐をしかとも結び嘆ひ巳べくもあらざれば老僕は終に子もべきなく送せし

沙金を受ありて續松両三束を贈りしかば義秀はその二束を鐵棒に結着。その一束に火を移して刀を取て腰に跨へ左に松火を照らし右に鐵棒を突立て高嶺を指てやと暗き路を頻に急ぎける程に妻二郎は山路を扶掖ても黒白も別ぬ皐月暗を辿りゆくも落延て程備の草鞋籠に火を移し路を照らしてその夜初更の比及より諏訪嶺をぞ攀登るさへぬぞ足弱の夜行て深山路は急ぐとまで動もすれば推戻さるゝやうに覺て歩行かねしと悩める女を慰めて又贊して進む男も身もまさと思ひ相れば毛骨立て心ならぬぞ弥まさる樹下低く山高く九折なる岨道を陟つ降つ幾遍と無く跡なるで息を吻ぬ向上て又急がば歩果敢とて程挟夜の深く更ぬく峯上を踰て前面より来るもの近く隨火光に見れば人とはあらん鬼ならん男とも女とも定かならざれどその髪を乱したる面は皺て赤黒く身長四尺餘りなるべし

もとより限りもなれど避んとて横路へ退んとて逼るを山路へ
妻二郎は金造る弓箭もその甲斐なく身を縮しく共侶ふ樹蔭に寄らんとす
程なく彼妖怪は遥遥と山路を辿と引搦て小脇に抱て峯上を
北へ走るを妻二郎は吐嗟と叫ぶ怒りふ堪ねばおそろしいを忘て氣を
激しくいそしく罩燈籠を樹の枝ふ掛置て弓ふ箭刻て弯んとすれば脆忽地
麻癲れていつもせんもなしあるを朽をしと焦燥く帯ふ燈籠結下て弓も
弓箭を携て何地まで追蒐ると追蒐ども妖怪は云反ぬ先へ先へと
後方を見返りつつ徐々と行りめくを追蒐んとて喘々直と走るふ近つ近くて九折
なる処ふ造れば忽地ふ失ひぬ妻二郎は共侶を死をぞ哭りし情人を妖怪に
掠攫れて是れのみ生て何ふせん命を的ふ往方を索ねく生死をもしくせざんやと
罵つ狂ひ其処ともなく深山を分入て喃山路を娘子と頻ふその名を
呼被れば彼方ふも女子の声にて遥ふ名を呼被る疑ふべくもあらねその人と
さて今為ん差ばしとも復ぬ方なしたゞ空ふ己んと思ひ心ふ勇まるを月明りけ
呼被れる声を聞ふ慕ひ上げば廿六日の月出く夜ふ入ぬ豆の半にあらぬを辛
しく近つ近く前面ふ渓河横ふ横たりあり樵夫のみかふ路ふて常ふ獨木
橋を掛う夏ふあるふの樹の上ふ山蛭のいと多ければ山蛭橋と呼ぶ豫く受
る甲斐もなく彼妖怪の所為なるべし橋を彼方へ引捨られば渡るべくもあらざり
なるを流れば山路ふ川を隔しと老る松の下に只ひとつのみ流れども彼妖
怪は何地遁んか影もせねば訪ひ勇まて声をあり立てその橋を枝樹を南へと
いそぐせども山路はあるを招ぐうも位のなるを延さ迫るを思ひ出でいそが
せば私の樹ふもとかけくとくれども腰立弦ぬや霜ふ刃を指さ示しそ問く
あゝと泣やう訪ひ限りもなれば妻二郎はその指むあるく刃逸れば

彼妖怪は三四丈ある大枝を折りて下る山路を疾視る眼の光凄しくて再視も
得ぬ。妻三郎は戦々兢々として射る落さんとすれども脚麻木れて
ぶるぶる不覚哩と落ちる弓と共に忽地擅と腰も抜してこれを拾立ちかねにうり當下
件の妖怪は枝より素流々々と下り来つ戦慄く泣く山路ぐ頭髻を楚と引掴て仰
さまに推倒せば吐嗟と叫ぶ顔を又視く血を盛る盆の異かく口を張り髪を反して
ぐくうち笑ふをの為体は夜叉羅刹欲細よ形様をぐ左りに山路を楚と押
へく右へと胸前へ推當て垂涎のぐれ鋭爪もて衣領の上より掛るごとく腹までescと
掻破れば衣はさらさら帯さへばらばらぐんど断離る程ふ皮肉は刻裂れ鳥尾骨摧け
大腸小腸頭れ出流て鮮血ふ身も浮くばかり空を掴て苦む形勢限なく眼も
鮮明の月ぐろ明くよく見えれば妻三郎は膽潰れ神魂逝ふ迷ぐ云ぐ
仰反くぐ倒息は絶ふり案下某生再説朝夷三郎義秀はその夜二更の

比及ふ諏訪嶺ふ攀登ふ如法暗夜のうなれば拳上も越せ小夜深くぐ
迷ひ行んん樵径欲とぐ迷へ忽然とくまれば男女迷ふぐそその声遥ふ
聞えり怪しぐ夜の深山路ふ誰ぞ子鳥ふ似ぬ彼婦と好夫と逃れてあらのぐ
過るとく山賊ぐふ追れ欲ぐは誰ぞ彼声の哀傷外ふ頭ぐ聞つも掠ハ
ぐぐ大丈夫とのぐぐ。ぐぐくと引ぐ。ぐぐくと声を発ぐふ入ぐ鮮暁の月隈
なく照らぐ溪川のほとりふ来ぐり。ぐれば只一個の旅人川端ふ佇ぐ立
ぐくふ。ぐぐくふこそ分ぐくもあらぬその面は豫て識る血山が若黨ぐ。
捨る弓箭の身ぐくぐくぐくと晴を定めて前面を倍と見渡せ怪
ぐ一隻の悪獣女子の胸前掻破りてその血を吸んと以舌潤唇して且ぐ嚇
脇を開ぐ一つ心地ぐぐ笑ふ異ふ異ふ一隻の狐々は極まり捉
られ女子は盆九郎が女兒山路ぐぐ遁奔遂ふ命を喪ふ只是不孝の冥罰歟

夜の山路は
山路
命を喪ふ

さるにつけ不便なり、食とる獣の残毒憎し、渡ハいそぐ追えやと、
怒り甚だし心頭に昇れども橋を彼方より引るゝ川幅廣く流水急なり劉備の的驢を
借りられば輙く渡さんなれども件の弓箭をうゝへりて、あれ敵を
忘れ、ゆゑ是究竟と取揚さく水際の樹蔭に退却し克雪固る程なれ彿々
山路の曾前へ来り口を三著て血を吸ひ腸をうち啖ふその高味堪ざるに又
肩を反らし額のあらを掩ふ仰ぎ笑ふ処を矢声とりけて漂と射る
寵違ひ額の真中肩さゝ縫ひて鉄四五寸裏出まで羽ぞう逼とぞ立る
残酷無雙の悪獣も窮所の痛痒に堪ず四下に響く苦痛の声と共に
仰さ反に倒るゝ義秀ハ思ひのまゝに悪獣を射とめ勝ぞ生るとのゝ
是ぞ弓を投捨て鐵棒突立々々浅瀬を索ねく川源へ五七町起げば川幅陝処
あり丈餘に過ぎず。もも水中に背を顯せ大なる石に腰あれば。あり

鐵棒を小脇に挾て咀り石へ石より前岸へ只二飛に跳越て進ゆくこと両三町。
走り近つ又鐵棒を猶々の吃を衝摧くあり強く當れば
忽地頭を突断ぬ扨月光に熟視に曩に形状
大犯ゆく方にその牡ゆるかれい雌雄ありとの世の風説も空しかりきの
一頭を漏せしの遺憾に思ひ三十餘日莊官林に抑留せられ甲斐ありて獨
言して立在む程に前面に殺集合る人あり先の一人憂を合し声を立て浅江
ぬし浅江主と呼かるに義秀遥かに聞れば月の光と里人の松の火光に紛れも
莊官皿山盆九郎が里人に成るく来りて當下盆九郎ハと呼る面色を彼方に
小腰を折め面目もなし浅江ぬし女児を知られしかんれハ彼ホを追留んとく
この山中に入りて今ちらもあく来て仇れ妻二郎を見てられば里人あり活さ
縛の趣を咨問に山路を妖怪に捉られる且その横死の為体を報をぞとり語く

此度は終に死絶う山路に横死は哀そ返事もあるべしと和殿は某を疎果て欲別をふ告げて夜を籠めて復この山を踰ゆるを心つかれ和殿はいかゝ

○この溪川を渡りゆく女児の雖言を驚かん願ふ詳に知らまほしく義秀些疑議せば某は前日より辞し去らんとすれども和主の在宿稀なれば意ふ黙止せ〜ふ今宵の騒動なくは思べを留守せ老僕が愚意を示して止宿醫療の酬

○沙金一裹を送らんかて災宅を辞し去く又この山辺に迷ひ彷徨ふ比婆漏

○る彿を財くこの今愛のあるも雖言を返らの本意を恢へ今べしも老婆さらばと

○ひつけく棒突立て遮んとすれば金九郎は遽しく水際に翔を抜くやよ侯べ浅江ぬ

○和殿が曩日の働は國府より賞を鎌倉殿の知り則その勧賞が越後殿の

○衣一襲沙金五十両下されうを府城より偽りを某に預り置り和殿が

○報ざりしは女児と婚姻整の宵が壇牽出と思べ

○涉るを聞て声高やふ呼れば義秀眼を瞪らさ尾陋く盆九郎女児を餌ふ

○蓬く詞りしの宵は今宵推く婚姻をとろかんと准備せ嫚侮愚人の挙動女児の

○横死もれより思まう況某は賜ひ物を汝ら壇牽出ふ出るよ嘗ん

○ふ觸れそはその後は送り弟かれ曉ら女児の横死は不孝の冥罰汝ら

○地て子を喪ひは年来貧の膏肥そそその為を肥せ悪報ざし病瘡ふ

○女をあるに生せ因果の道理を感悟して私欲を塞ぐ民を憐れ縣が宿吏あれは

○猛虎も子を負ふく江を渡りて去うしとあり毒蠶の人を捉もしもの溪が住とあり

○譬は宋勾韓愈ふ善政を及ぶもとも或は山賊或は悪獄汝ら配下は集合りかれそのの

○奸詐の招くふ天理寔ふ怕べ今さら烏滸の佞人が告ふ要なれども後の世まで

○置土産はふも驚さんよくもなけれこの地が抑留せ礼は聊やあれは浅江小豊六こ名

○告は養父が象る假名しあるべ四月中旬陸奥の役が平泉を火攻しく賊首

吉田屋

經任を誅戮し、ひとり厨川の起居く五百賊を屠りて朝夷三郎平朝臣義秀は見つ。

友鶴とふ一妾あれども、これ花色を愛ふあまり遐土の卑職ふ目をうけて人の婿とあるめ。

○ふすゑ山路に死ぬ。又妻三郎とふ奸夫のくるも汝ら望は空華かんのうもてこそ忘れ。

飽ぬ怨ふ驚懲して忽地ちまちに入る深山路の繁茂が下に樹隠れて往方もなくぞありける。

兇郎は義秀ふ懲さしめ、ひとり残てなほ假名を朝夷ありしを初て知りぬ。

あはれ果ぬ里へ共侶は忙然と目送りつ天明て流水に梁をそそぐ山路妻三郎ふ殺せ

荘厳林に昇る久返しと懇ふ華ぬ兇郎とりこの下に話ひ。さる程は義秀はその話豆

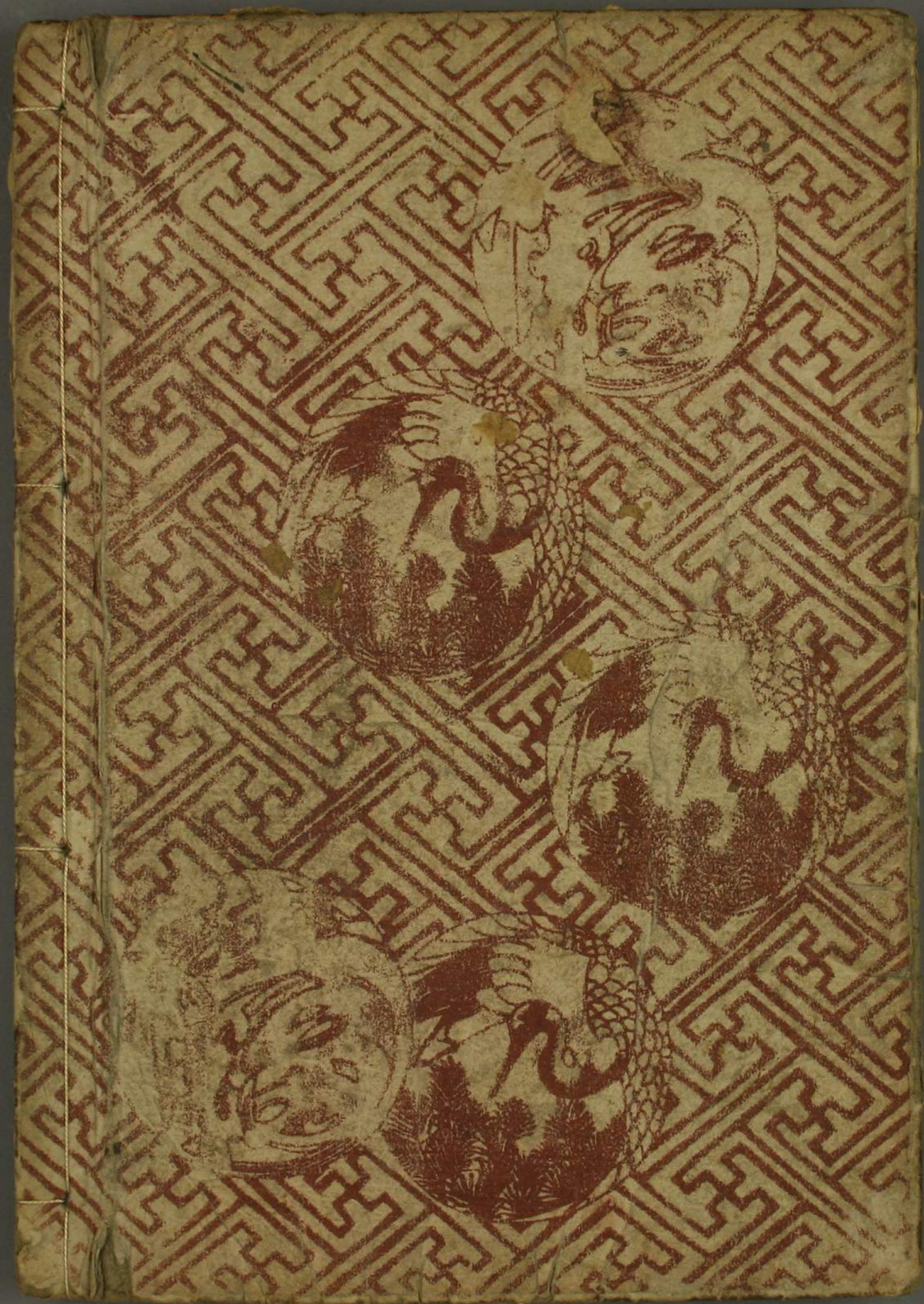
行地ふ辛りそこの宵は新發田ふ宿投りつ又数十里の路を經て同國ふ高田ふ起ぬ。

四日と走りて市振の駅より越中ふ入りぬ。泊澤より急ぎて。

吉田屋

吉田屋

吉田屋

著る畢竟義秀稲荷詣より後の物語甚麼ぞ次の巻に鮮やかなるべし。

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之一終